

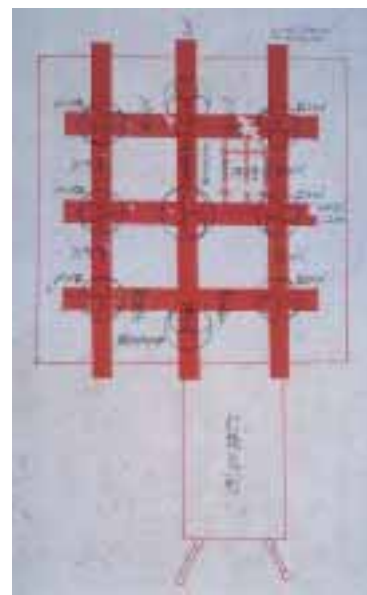
<b>特集</b> <b>古代都市</b> ～日本人とまちづくりの原点～	<b>Special Features</b> <b>Ancient cities</b> The Japanese and the origins of town development	<b>古代の巨大都市</b> Ancient megalopolises
<h1>古代の出雲世界</h1>		
<b>松本岩雄</b> MATSUMOTO Iwao	島根県立古代出雲歴史博物館/学芸部長	

### 1—出雲大社に伝わる謎の古図

出雲大社は大国主神を祭神とし、縁結びの神・福の神として崇敬を集め、広く親しまれている。島根半島の西端部、出雲市大社町杵築東に鎮座し、かつては杵築大社や天日隅宮とも呼ばれた。その本殿は「大社造」と呼ばれる社殿形式で、伊勢神宮の神明造とともに我が国の神社建築で最も古い形式を伝えていられる。大社造は9本の柱を田の字形に配し、側柱が桁を支え、棟持柱(出雲大社では宇豆柱)が棟を支える切妻屋根で、妻入りの形式である。この形式は出雲地域にほぼ限定される地方色の強い社殿形式である。

出雲大社宮司家である千家家に、『金輪御造営差図』という古代の神殿を平面的に描いたとされる古い図面が伝えられている。神殿を構成する9本の各柱は、いずれも3本の材を鉄の輪で一つに束ねて1本の柱として描かれており、建築史の常識からみると異例のものである。

しかも、3本束ねの柱径は1丈(約3m)、階段の長さは1町(約109m)と記され



■図1—巨大本殿を描いた図「金輪御造営差図」 ■写真1—出雲大社境内遺跡から出土した巨大柱(千家尊祐氏蔵)



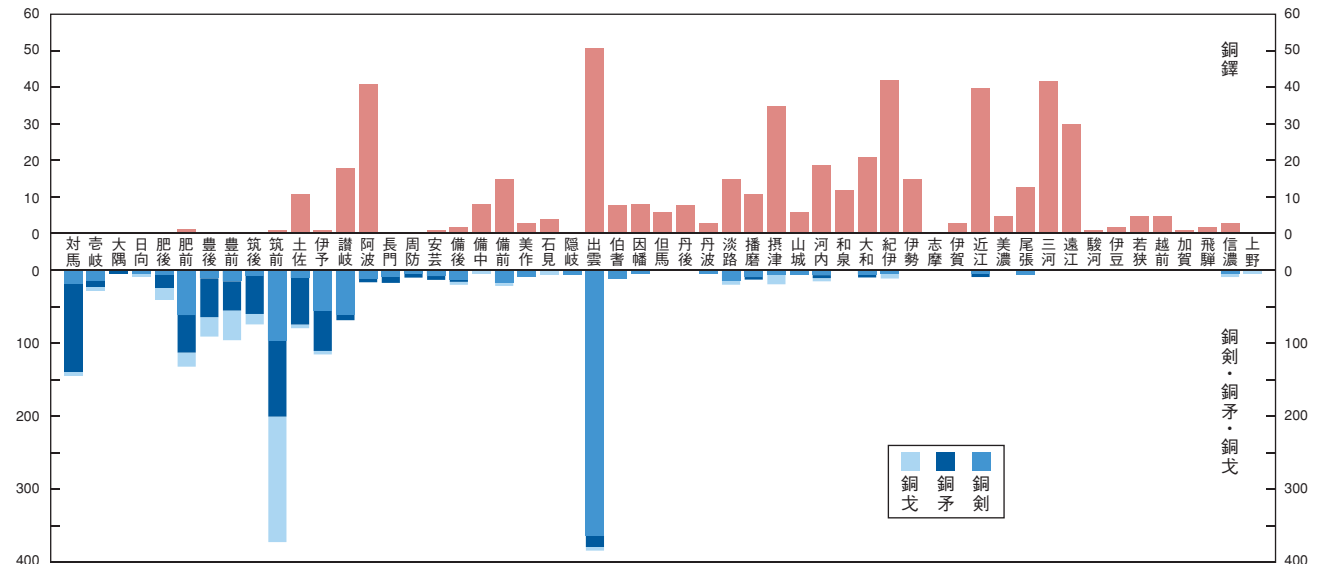
ており、規模においても尋常なものではない。この図面については、特異な構造であること、規模が巨大であること、製作年代に関する記述がないことなどから、単なる想像上の伝承図といわれてきた。

### 2—巨大柱の発見

祭礼準備室建設に伴い、平成12年に境内の発掘調査が行われたところ、直径約1.3mのスギ材を3本組にした巨大な柱が出土した。出土状況は『金輪御造営差図』に描かれていたものに極めて近かった。

発掘された柱は大社造を構成する9本柱のうち、本殿中央の岩根御柱(心柱)、その南にある宇豆柱、その東にある南東側柱の3本である。柱穴の平面形は8.5×6.0mあまりの倒卵形を呈し、一方向にスロープを有するものであった。その穴に3本一組の柱を立てて、周囲に多量の礫を詰め込んで強固に固定されていた。3本の柱の心々距離から本殿規模を推定すると、梁間13.4m、桁行11.6mになる。想像を絶する巨大な神殿が実在していたのである。高さについては、東大寺大仏殿より高かったとされる『口遊』(970年)の記述などから48mを想定する説がある。

巨大柱の周辺から出土した土器の年代は、12世紀後半から13世紀代のものであった。宇豆柱材の放射性炭素による年代測定結果は1215～1240年(95%信頼限度)で、心柱下方に置かれていたスギの礎板の年輪年代測定結果は、残存最外年輪が1227年とされた。大社の古文書によると、宝治2年(1248年)に遷宮が行われており、その材木の伐り出しが始まったのが寛喜元年(1229年)とされている。土器・放射性炭素・年



■図2—旧国別の青銅器出土数(島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター「青銅器埋納地調査報告書Ⅰ・Ⅱ」<2002年・2006年>をもとに作成)

輪・文献などの示す年代を総合的に勘案すると、発見された柱の遺構は宝治2年の神殿である可能性が高い。

このような巨大な神殿はいついつ頃から存在したのであろうか。出雲大社の創建については、『古事記』や『日本書紀』の「国譲神話」に代表されるように、奈良時代に記された神話上で語られる。また、『日本書紀』の斉明紀5年(659年)には、「是歳、命出雲国造。修葺神之宮」と記され、日本で最も古い記録をもつ神社の一つといえるが、本殿の詳細については不明と言わざるを得ない。

### 3—聖なる場所の記憶

出雲大社の鎮座する地が、いつから祭祀空間として意識されていたのであろうか。境内地は出雲平野の北西にあたる北山山系の谷間に位置し、三方を山で囲まれ南に開けている。



■写真2—荒神谷遺跡の銅剣出土状況

発掘調査によれば古墳時代の地形は現在と異なり、2本の川が境内地中央へ流れ込む流路をとっており、その水際と流路内に7～8世紀の土器が置かれていた。旧吉野川左岸(拝殿の北東)の黒色土中からは古墳時代前期後半の多数の土器とともに、瑪瑙勾玉・滑石白玉などが出土した。さらに、境内の東方200mの地点にある命主社背後の大石の下からは、弥生時代の武器形青銅器と翡翠勾玉が出土している。

のちの出雲大社とどのように繋がるのか即断の限りではないが、出雲大社の境内地およびその周辺は、少なくとも弥生時代には何らかの祭祀空間として意識されていたものと考えられる。

### 4—塗り替えられた青銅器文化

弥生時代の青銅器として主要なものに銅剣・銅矛・銅戈・銅鐸などがある。これらの出土分布をふまえて和辻哲郎氏が『日本古代文化』(1939年)において、北九州を中心とする「銅剣銅矛文化圏」と近畿を中心とする「銅鐸文化圏」の対立図式を唱えた。この説は、長年教科書にも取り上げられていたため広く知られていた。図式によれば、出雲は双方の分布の中心地から最も離れた地域、いわば辺境の地ともいえる状況であった。

ところが、昭和59～60年(1984～85年)に荒神谷遺跡で銅剣358本、銅矛16本、銅鐸6個もの大量の青銅器が出土した。さらに平成8年に加茂岩倉遺跡で史上最多となる39個もの銅鐸が発見され、弥生時代の出雲はとても重要な地域であることが明らかになった。

#### 4.1 常識を覆した荒神谷の大発見

荒神谷遺跡は島根県東部の斐川町大字神庭宇西谷の



■写真3—荒神谷遺跡の銅鐸・銅矛出土状況



■写真4—加茂岩倉遺跡から発見された史上最多となる39個の銅鐸



■写真5—加茂岩倉遺跡出土の23号銅鐸

小さな山あいにある。日本中を驚愕させたのは、それまでの我が国の銅剣発見総数約300本をはるかに上回る358本が、1カ所から出土したことである。銅剣は小丘陵の斜面に掘られた坑の中に刃を起こして接する状態で4列に並べて置き、粒子の細かい粘土で覆った後に土が盛られていた。

さらに銅剣出土地点より約7m谷奥で、銅矛と銅鐸が初めて同じ坑の中から発見された。丘陵斜面に掘られた坑の中央部に、銅鐸6個が鱗を立てて鈕を向き合わせにして埋めてあった。その東に、銅矛16本が刃先と袋部を交互にして刃を起こした状態で置かれていた。

銅剣・銅矛・銅戈などの青銅武器は、朝鮮半島から日本にもたらされた当初は、先端が鋭く刃も付けられていた。ところが日本列島で本格的な生産が始まると、しだいに大形化して刃先も丸くなり実用的な武器としては使えなくなる。荒神谷の銅剣・銅矛はいずれも武器としての機能を失った段階のもので、祭器として使用されたものと考えられる。荒神谷銅剣は長さ約50cmの「中細形銅剣c類」とされる同一型式に属するもので、「出雲型銅剣」とも呼ばれ、出雲産の可能性がある。344本の銅剣の茎には、鑄造後にタガネ状工具による「×」の刻印がほどこされていた。「×」印の意味は未解明であるが、「神霊をここに結び鎮める」という意味、すなわち埋納した剣のもつ威力が永久に逃げないようにするためとする説もある。

銅矛は中細形と中広形型式のものが出土している。鋳型の出土例や刃部の研ぎ分けの特徴から北部九州産の銅矛が出雲にもたらされたものと考えられる。「研ぎ分け」とは刃部の研ぐ方向を意識的に変えたもので、見る角度によって刃部がキラキラと輝く効果をねらったものである。

銅鐸のルーツは中国や朝鮮半島で家畜の首に付けた

り、呪術師が使用していた小さな鈴といわれている。もともとは音を発する道具であったが、次第に大形化し、遠くから仰ぎ見るだけのものへと変化した。荒神谷銅鐸は最古段階(菱環鈕式)と古段階(外縁付鈕式)のものが出土しており、音を鳴らす段階のものである。1号銅鐸は、鈕の断面形が2段で鐸身に市松文様や重丸文があることなど、これまで近畿地域で見つかった銅鐸にはない特徴をもっており、出雲産の可能性がある。

#### 4.2 史上最多の銅鐸—加茂岩倉遺跡—

平成8年、荒神谷遺跡とは山を挟んでわずか3.4kmの雲南市加茂町大字岩倉の農道工事現場で、史上最多となる39個もの銅鐸が発見された。この発見により出雲の銅鐸は51個となり、旧国別にみると全国で最も多い地域になった。

銅鐸は丘陵斜面に掘られた坑の中に、身を横たえて鱗を立てて、裾を向かい合わせにして置かれていた。39個の銅鐸は、高さ約45cmのものが20個、約30cmのものが19個ある。主文様は流水文と袈裟摺文だが、シカ・カメ・トンボ・四足獣・顔などの絵画が鑄出されたものもある。型式はほぼ古段階と中段階(扁平鈕式)で構成されており、多くは弥生中期に製作されたものと推測される。15組26個の同範銅鐸や鈕に「×」印を印刻した例が12個確認されている。同範銅鐸には近畿・四国・北陸などのものがあり、他地域との交流を考えると重要である。「×」印はこれまで荒神谷銅剣のみに確認されていたもので、両地域集団の密接な関係をうかがうことができる。

加茂岩倉銅鐸の多くは畿内産とみられるものの、18・23・35号銅鐸はこれまで近畿地域を中心に出土していた銅鐸には見られない文様があることから、出雲あるいはその周辺で製作された可能性がある。

## 5—青銅器から四隅突出型墓へ

なぜ大量の青銅器が出雲に埋められたのであろうか。荒神谷・加茂岩倉遺跡の発見以来様々な説が唱えられている。例えば「(荒神谷は)非常に特殊な在り方で、九州と出雲と近畿の各地域の最高の祭器をあれだけ集めたのは、西日本全体にかかわるような何か非常に特殊なことがあったのでは」との想定や、「近畿集団の総意の下に銅鐸の遠隔地埋納を実修する共同派遣がなされ、出雲を中心とする地域の勢力がそれを受け入れた」との考えなどがある。さらに「荒神谷の武器形を主体とする大量の祭器群は北部九州勢力による埋納、対する加茂岩倉の銅鐸からなる大量の祭器群は畿内勢力による埋納と理解し、そこに大結界合戦が実施された」との説もある。

### 5.1 出雲の弥生文化の特色

出雲の青銅器には銅鐸・武器形青銅器ともに初期の型式のものから見る事ができ、早くから北部九州・近畿双方との密接な交流をうかがうことができる。しかし、ただ単に東西の両文化を受容するのみではなく、やがて地域独自の青銅器を創り出すようになった。出雲型銅剣や加茂岩倉18・23・35号銅鐸などがそれである。青銅器以外の遺物、たとえば土器の特徴をみても各地の製作技法・文様を取り入れながらも、同時に複数の異なった地域から伝えられた要素を組み合わせ、新たな文様も創り出している。

これらのことは、出雲地域が方々の地域と深く交渉しながらも、他とは異なった一つの地域性、さらには地域勢力を形成していたことを示している。

### 5.2 弥生王墓誕生

出雲では大量に弥生青銅器が出土しているにもかかわらず、銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈ともに最も新しい型式のものが1例もない(出雲市青木遺跡で、先年新しい型式の銅鐸片が出土したが、耳を切断して頭飾りに転用したもの)。したがって、青銅器の製作時期から推測すると、出雲ではどうも弥生中期末から後期初頭までには、すべての青銅器を埋納してしまっただけで、青銅器は当時、鑄造技術の高さ・原料入手の困難さなどきわめて希少価値が高いものであったとみられるが、出雲では近畿や九州に先駆けていち早く使用されなくなってしまう。

出雲を始めとする山陰地域では、青銅器が大量に埋納される時期に前後して、四隅突出型墓という特異な墳墓が造られる。弥生中期後半から後期末葉にかけて築造されているが、近畿や瀬戸内沿岸部・九州などではまったくみられない墳墓である。とくに出雲では、弥生後期後半には四隅突出型墓を墳墓の最高形式と位置付け、



■写真6—四隅突出型の墳墓(安来市宮山IV号墓)

規模や貼石・列石の配置において一定の格差をもちつつ大中小の四隅突出型墓が築造されることになる。すなわち、出雲においては青銅器を使用していた時代と、四隅突出型墓という大規模な墳墓が築造される弥生後期の段階では、大きな社会的変化があったものと考えられる。

### 5.3 青銅器はなぜ埋められたのか

銅鐸を始めとする弥生青銅器は、多くは農耕祭祀に使用された共同体共有の祭器と考えられている。弥生青銅器が共同体に根付いた農耕祭祀の道具であれば、政治・社会の大きな変革があってもどこかに後世まで残存し、その痕跡があってもよいと考えられるが、その形跡が認められない。青銅器が埋納される段階においては、農耕祭祀の道具というより青銅器を中心とした祭りによって集団をまとめて団結力を強化するなど、共同体の存亡を決する際の主要な祭器になっていたのではなかろうか。そして、青銅器の管理・所有についても一部の支配者層が握る状況であったと推測できよう。

憶測を重ねれば、出雲において弥生中期末から後期初頭の頃、集団の存亡を決する大きな危機が訪れ、首長自らが所有する貴重な祭器を大地の神に捧げてまでも集団を守り、その決意を示すとともに実行することによって、司祭者(王)自身の力・求心力を高めたのであろう。

それまでの祭器(青銅器)を真っ向から否定してしまうのではなく、新たな支配の論理(神話)をつくり、集団をまとめていく力を特定の人物の権威へとすり替えることによって青銅器は共同体成員の一定の同意のもとに郑重に大地の神に奉納されたかと推測される。それに連動する形で四隅突出型墓が築かれるようになると理解できるのではなかろうか。

<写真提供>

写真1、2、6、図1 島根県古代文化センター

写真3、4、5 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター